

母体搬送された妊産婦の 入院時における不安因子の分析

2階西病棟

○公文 典子・下村 愛子・大山 晶子

公文 薫・後藤 恵・谷脇 文子

I はじめに

妊娠中何らかの異常をきたした妊産婦は、突然のストレスに遭遇する。このような妊産婦に対して、適切な看護介入をすることは、対象の防衛規制がうまく機能し精神衛生を保つために重要である。

母体搬送は、周産期における母児の救命と高度治療を目的とし、近年増加の一途をたどっている。当院においては、過去2年間の母体搬送件数は108件で、これは、分娩件数の約40%を占めている。

母体搬送時の妊産婦の不安については、山下、徳田らにより報告されており、また、不安についての関連因子についても検討がされているがまだ明らかではない。母体搬送された妊産婦の心配や不安に関連する要因を明らかにする目的で、当院への救急車による母体搬送患者に対して、入院時に焦点をあて不安についてアンケート調査を実施した。その結果について、不安の実態及び背景との関連性、看護婦の対応、精神的支援者について分析したので報告する。

II 研究方法

1. 調査対象者

平成4年1月1日～平成5年10月31日の期間において、当院産科への紹介患者のうち、救急車による母体搬送者（死産・新生児死亡を除く）39名。

2. 調査方法（表1）

1) 基本的属性は、入院中のカルテより調査

2) 郵送配布によるアンケート調査

回収率：32名 82%

表1 調査方法

背景

1. 属性（年齢・職業の有無）
2. 初経産別
3. 入院時妊娠週数
4. 24時間以内の分娩者
5. 入院時間帯 時間内：8時30分～16時30分
時間外：16時30分～翌朝8時30分
6. 母体搬送に要した距離 当院からの距離20km以内（所要時間30分以内）
当院からの距離20km以上（所要時間30分以外）

アンケート内容

1. 入院時の不安や心配の内容
 - 1) 赤ちゃんが大丈夫かどうか
 - 2) お腹のほりが止まらないこと
 - 3) お産のこと
 - 4) 家庭のこと
 - 5) 仕事のこと
 - 6) 入院中の生活のこと
 - 7) 入院費用のこと（経済的なこと）
 - 8) 別に心配ない
2. 入院時の看護婦の対応（言葉・態度）
 - 1) 看護婦の言葉・態度
A 安心できた B 恐かった C 話しかけにくかった D 勇気づけられた
 - 2) 入院時いやだったこと
3. 入院時の精神的支援者
 - 1) 入院時の付添者
 - 2) 入院後最も側にいてほしいと思った人

3. 調査期間

平成5年9月20日～11月10日

4. 調査内容

- 1) 対象の背景
- 2) 入院時に妊産婦が抱いた不安の内容

3) 入院時の看護婦の対応：言葉・態度

4) 入院時の精神的支援者の有無

5. 分析方法

不安の内容は、新道による妊娠中・分娩中の心身、社会的諸側面の相関メカニズムを参考に、各調査項目と不安との関連について分析した。

III 結 果

1. 対象者の背景は、表2及び表3に示したとおりである。

表2 対象者の背景

	内 訳	人数
年 齢	10代	1名
	20-24才	7名
	25-29才	10名
	30-34才	12名
	35才以上	2名
職 業 の 有 無	有職者	10名
	無職者	22名
初・経産別	初産婦	17名
	経産婦	15名
入 院 時 間 帯	時間内 (8時30分~16時30分)	22名
	時間外 (16時30分~翌日 8時30分)	10名
母体搬送に要した 距離 (所要時間)	20km以内 (30分以内)	17名
	20km以上 (30分以上)	15名

表3 入院時妊娠週数別・初経産別・職業の有無別分類

入院時妊娠週数 (人数)	~28週未満		28週~37週未満		37週~
	~22週 6日	23~27週 6日	28~31週 6日	32~36週 6日	37週以降
初経産別(人数)	(2)	(9)	(7)	(10)	(4)
初産婦(17) ※24時間 以内分娩 件数(11)	2		1 (※1)	3 (※2)	2 (※2)
有職者 無職者		3 (※1)	2 (※2)	2 (※2)	2 (※1)
経産婦(15) ※24時間 以内分娩 件数(7)		1 (※1)	1 (※1)		
有職者 無職者		5 (※4)	3	5 (※1)	

2. 入院時に妊産婦が抱いた不安の内容

不安の内容は、全体では、年齢別、職業の有無、初経産別、妊娠週数別、分娩に至るまでの期間、入院時間帯別、距離別を問わず全ての者32名（100%）が、赤ちゃんが大丈夫かどうか不安であると答えている。次いで、お産やお腹のはりが止まらないなど母体自身への関心が11名（34%）、家庭及び入院中の生活に関することが9名（28%）であった。

妊娠週数別では、お産に関する不安において18～76%と最も差が大きく、妊娠週数が進んでいる者ほど不安が高くなる傾向があり、その中でも初産婦が高率であった。（図1）

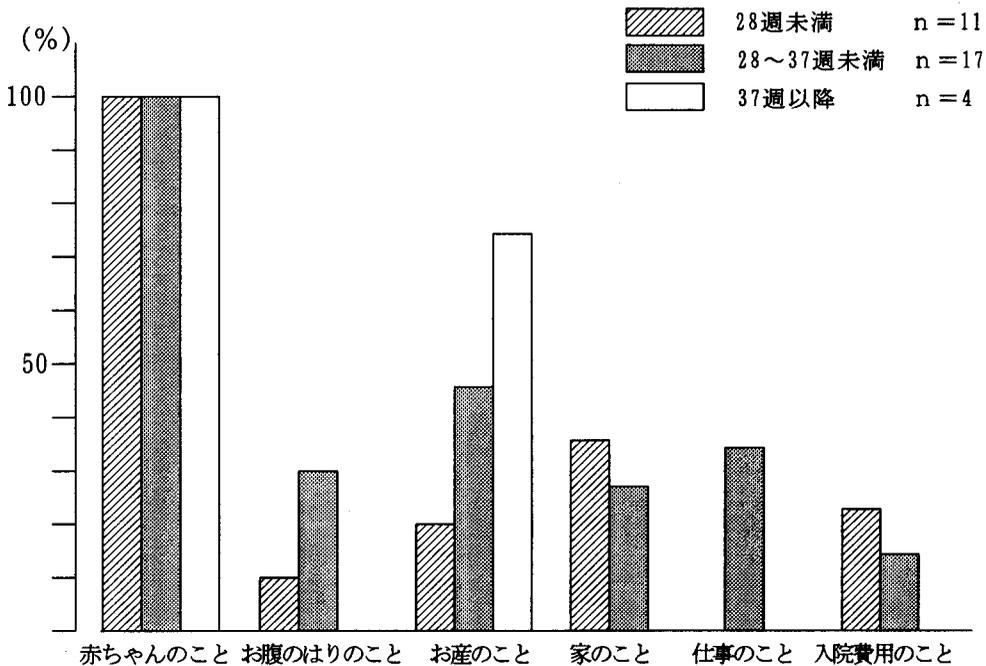


図1 入院時の妊娠週数別不安項目の比較

距離別では、20km以上（所要時間30分以上）の者がお腹のはりに関する不安が高率であった。

年齢別では、不安の各項目において差はみられなかった。

職業の有無別では、両群ともお産のことが高率であった。

入院時間帯による比較では、時間外群の特に深夜帯において、お産のことが高率であった。

一人当たりの不安の項目数による比較では、初経産別及び、妊娠週数別、距離別において有意差はみられなかった。

3. 入院時の看護婦の対応：言葉・態度

入院時の看護婦の対応を、患者の評価をもとに支持的及び非支持的内容に分類した。全体では32名中28名（88%）が支持的評価をしていた。

支持的言葉の内容は、頑張ろうね、大丈夫という声かけに勇気づけられたが最も多く、次いで話し方が優しく丁寧で安心できた等であった。

態度は、笑顔が最も多く、落ち着いた態度やてきぱきとした態度と行動に安心感を抱いた。空腹・喉の渇き等気づかってくれた、側にいて手を握ったり、背中をさすってくれた等があげられ、精神的緊張の緩和が得られていた。

非支持的内容は、全体で4名あり、初産婦1名が、聞かれることが多く気持ちに余裕がなく嫌だったと答え、経産婦は、3名のうち2名が処置の素早さに恐ろしさを感じている。

態度では、1名が忙しそうで話しかけづらかったであった。

入院時間帯では、時間外群に支持的評価が高いが、恐かったと答えた者もあった。

入院時嫌だと思ったことの内容は、処置が多いこと11名、何処に連れて行かれるか不安7名があげられていた。

4. 入院時の精神的支援者の有無

来院時の付添い者は、医療従事者以外に実母10名、夫9名、夫と実母3名であった。

病室に移った後最も側にいて欲しいと思ったのは、夫22名、夫と実母4名、実母3名の順で、夫と解答した群は、対象者の背景との間に関連は見られなかった。実母については、距離別20km以上と、初産婦の占める割合が高い。

IV 考 察

今回の調査で、母体搬送された妊産婦の不安は、1. 全ての者が、児が大丈夫であるかについて不安をあげており、次いで2. お腹のはりが止まらない、3. お産のこと、4. 家庭及び入院中の生活に関することであることが明らかになった。これらのうち、2と3に特色があること、4については変動が少ないことがわかった。

お腹のはりが止まらないことへの不安は、距離別20km以上の群が、高率を占める傾向にあった。遠距離からの搬送は、時間を要することがストレスとなり妊娠継続への不安、胎児生命への不安と相乗して腹緊への不安の増強が考えられる。

お産のことへの不安は、入院時妊娠週数の進んでいるもの及び初産婦が、それぞれ高率を占めたことから、不安の要因としての関連性が示唆された。妊娠期間が進むにつれて、母体搬

送という突然のストレスは、分娩への予測される不安感情を生じさせ、また初産婦においては、分娩に対してより強い不安を持ちやすいことから、お産に対する不安が強いことが考えられる。

一人当たりの不安の項目数において背景との間に有意差のないことは、妊産婦に体験される不安が、妊娠時期によっても変動があり、極めて不安定で容易に危機的状況に陥る可能性が高いと推測される。

新道は、ストレスの多い出来事の知覚の中で、医療従事者の影響・医療看護処置の影響をあげている。今回の調査では、不安緩和は、特に表情、タッチング、励ましの言葉が強く関連していることがわかった。しかし、少数の者が、看護婦の対応に対し恐怖の感情が生じており、母体搬送のような緊急入院は、処置におわれ、妊婦の不安の訴えを矮小化してしまう傾向があったのではないかと考えられる。

妊産婦の精神的支援者として、初経産婦ともに夫及び実母があげられ、不安の緩和に役立ったと考えられる。妊産婦にとっての重要他者は、妊娠、分娩、産褥の各期にわたって、ストレスの軽減、母親役割の取得といった課題達成の援助者として、同様にストレスを受けており、援助者であるよりも援助される事が必要な場合もある。看護者は、夫や実母が重要他者であることを理解し、役割獲得ができるよう援助する事は、不安緩和だけでなく母性育成の発展からも大切である。

今回、母体搬送された妊産婦の入院時の不安の因子を分析する手がかりとして、新道の心身・社会的諸側面のメカニズムを支持する結果を得た。

V ま と め

1. 不安の各項目と背景との間に有意差はみられなかったが、児の安否については、全ての妊産婦が不安と答え、お産については、妊娠週数が進んでいる者ほど不安が高くなる傾向があり、その中でも初産婦の不安が高率であった。

2. 看護婦の励ましの言葉や表情、タッチングは不安緩和と強い関連性があると考えられる。

3. 精神的支援者として、夫、実母が重要他者である事が確認できた。

VI お わ り に

本研究のデータは、対象者の人数が少なかった事、又退院後のアンケート調査であり入

院中の経過でその内容、結果に偏りを生じさせた可能性がある。

今後、妊産婦の不安の研究を進めるため、不安の程度の分析を課題としたい。

引用・参考文献

- 1) 新道幸恵他：母性の心理社会的側面と看護ケア，p2～46，p97～152，医学書院，1993.
- 2) 市川 潤：妊産婦のこころの動き，第1版，p116～130，医学書院，1990.
- 3) 花沢成一：母性心理学，第1版，p214～225，医学書院，1992.
- 5) 小島瑛子：看護理論とその実践への展開，p176～183，全原出版株式会社，1993.
- 5) 石川稔生監訳：クリニカルナーシング1，看護診断，第1版，p248～266，371～379，医学書院，1992.
- 6) 徳田幸江他：母体搬送された妊婦の看護—アンケート調査による現状から—第24回母性看護，日本看護協会，1993.
- 7) 山下信子他：当院に母体搬送された妊産婦の医療及び看護の問題点，母性衛生，第31巻3号，p392～395，1990.

(平成6年11月1日～2日，茨城県にて開催の第15回)
日本看護協会分科会母性看護で発表